報告番号	香大医博乙　第　２９５号

様式２０２

学位論文の内容の要旨

氏　　名	鈴木　裕美

論文題目	Behavior problems and dysfunctional parenting: Cross-sectional study in Japan

（論文要旨）

【背景】本邦では発達障害者支援法により、発達障害の早期発見、早期介入を推し進める政策が取られるようになった。そのため、発達障害に関する知識が広がり、それと共に問題行動を示す子どもは保育施設や教育機関で発達障害を疑われることが多くなった。この研究は、子どもの問題行動は発達障害以外の因子と有意に関連するのではないかという仮説を基にアンケート調査した。

【方法】この研究は、香川県高松市にある全34保育所に通所する2～5歳児（3,515人）の保護者を対象に、自記式アンケートを2015年2～3月に実施した。アンケートでは保護者の年齢、婚姻状況、子どもの数、学歴、年収、就労時間の他、精神的健康度、子育てスタイル（敵意的、過剰反応、過剰な甘やかし）、発達障害の診断の有無、子どもの問題行動（Eyberg Child Behavior Inventory score: ECBIスコア）を調査した。

【結果】この研究に1,410人の母親が参加した。発達障害と診断されている子どもは7.8%であったが、ECBIで問題行動がカットオフ値を越している子どもは17%いた。交絡因子を調整すると、母親の悪い精神的健康度やすべての子育てスタイル（敵意的、過剰反応、過剰な甘やかし）が子どもの問題行動と有意に関連があることが分かった。また、両親の関係性の悪さも子どもの問題行動と有意に関連があることが分かった。

【考察】子どもの問題行動は、母親の婚姻状況や世帯年収、学歴とは有意な相関が認められなかった。つまり社会経済的弱者であることは子どもの問題行動を説明することはできないが、母親が専業主婦であることは子どもの問題行動と関連があった。社会的繋がりのない子育てはストレスを生み、精神的健康度の悪化や不適切な子育てに繋がる可能性が示唆された。

不適切な子育てスタイルが子どもの問題行動と有意な関連があり、夫婦仲の良い両親に育てられた子どもは、問題行動が少ないことがわかった。先行研究でも同様の結果があり、争いのない安定した家庭環境は子どもの攻撃的態度を予防し、心を穏やかに保つことができると考えられる。

【結論】子どもの問題行動は、夫婦関係や子育ての仕方と強い関連があり、そこに今後の介入すべきポイントがあると示唆された。国が推し進める発達障害の早期発見、早期介入も重要ではあるが、ペアレントトレーニングなどの家庭介入を行うことで、保護者が適切な子育て方法を学び、家庭環境を安定させることで子どもの問題行動を改善することにつながると考えられる。

表 1. 子どもの問題行動（ECBI スコア[1]）と親子の特徴

特徴 (n=1,410)	数 (%)	ECBI スコア，平均 (SD)	*p* 値
母親の年齢 (歳)			
＜29	222 (15.7)	108.4 (27.3)	
30～34	430 (30.5)	104.3 (28.2)	
35～39	488 (34.6)	104.8 (26.1)	
＞40	270 (19.1)	104.7 (26.9)	0.28
婚姻状況			
既婚	1,258 (89.2)	105.0 (27.1)	
シングル	152 (10.8)	106.8 (27.6)	0.44
世帯年収			
＜250 万円	252 (17.9)	106.3 (28.8)	
250～500 万円	604 (42.8)	105.0 (27.0)	
＞500 万円	554 (39.3)	104.9 (26.4)	0.78
最終学歴			
中学校	70 (5.0)	111.4 (37.3)	
高校	418 (29.6)	104.8 (26.4)	
高卒後進学[2]	922 (65.4)	104.9 (26.5)	0.15
子どもの発達障害の有無			
あり	110 (7.8)	112.3 (30.1)	
なし	1,300 (92.2)	104.6 (26.8)	<0.01

1.ECBI は 36 問（7 件法）36～252 点で 131 点をカットオフ値にしており、点数が高いほど問題行動が多いことを意味する。2.専門学校、短大、大学、大学院を含む。

表 2　多変量解析：子どもの問題行動（ECBI スコア）との関連因子

	Model 1		Model 2	
特徴 (n=1,410)	標準化 β	*p* 値	標準化 β	*p* 値
母親の年齢 (歳)				
＜29	0.06	0.05	0.07	0.04
30～34	-0.03	0.28	-0.03	0.26
35～39	-0.02	0.51	-0.02	0.55
＞40	Reference		Reference	
週の就労時間（時間）				
0	0.10	0.03	0.09	0.04
＜20	-0.07	0.11	-0.09	0.04
20～40	-0.04	0.27	-0.02	0.55
＞40	Reference		Reference	
子どもの発達障害の有無				
あり	0.08		0.07	
なし	Reference	*<0.01*	Reference	*<0.01*
精神的健康度 K6	0.31	*<0.0001*	0.30	*<0.0001*
敵意的な子育て	0.29	*<0.0001*	0.29	*<0.0001*
過剰反応する子育て	0.29	*<0.0001*	0.28	*<0.0001*
過剰に甘やかす子育て	0.14	*<0.0001*	0.15	*<0.0001*
夫婦関係	-0.30	*<0.0001*	-0.29	*<0.0001*

Model 1 は未調整。Model 2 は母親の年齢、 最終学歴、世帯年収、就労時間、健常教、子どもの数、子育てサポートの有無、子どもの発達障害の有無で調整。従属変数は ECBI スコアで多重回帰分析を実施。

掲　載　誌　名	Pediatrics International	第 61 巻，第 11 号	
（公表予定） 掲　載　年　月	2019年　7月	出版社（等）名	Wiley Publishing Japan
Peer Review		有 ・ 無	

（備考）論文要旨は，日本語で１，５００字以内にまとめてください。